薬局薬剤師の役割は一次予防にあり！

札幌市西区　二十四軒薬局
高市 和之さん

国の医療費が膨らみ続ける中、ＯＴＣ医薬品によるセルフメディケーションを推進していく政策が打ち出されています。今まで以上に地域住民が自ら健康を作り上げていく時代となる中で、薬局薬剤師のあり方はどう変わってくるのでしょうか。私たちは、その１つの道しるべとして検体測定に注目しました。今回、薬局における検体測定の先駆者であり、100％面分業を実践されている札幌市西区の二十四軒薬局の高市和之先生を訪ね、薬局薬剤師のあるべき姿についてお話を聞かせていただきました（日本薬学生連盟2016年度広報統括理事＝小池雄悟：立命館大学４年、九州支部長＝比嘉遼太郎：九州保健福祉大学３年）

対談　薬剤師×薬学生

「かかる前薬局」機能を果たすべき

患者のストーリーに最期まで寄り添う

――高市先生が検体測定を始めた理由を教えてください。

私は大学卒業後、薬剤師として働き始めましたが、ＯＴＣ医薬品も取り扱っていました。その時に、「喉が乾く」と言ってドリンク剤を買いに来る人が何人もいて、その中に「もしかしたら、糖尿病かな」と疑ったケースがありました。案の定、病院に行ってもらうと血糖値は大幅に基準を超えていました。そこで、思ったんですよね。「糖尿病って、もしかして放置されているんじゃないか」と。

当時は、今ほどいい薬もありませんでしたし、糖尿病性腎症で透析患者もうなぎ上りに増えていました。また、当時の生活指導と言えば、叱って叱って叱り倒すようなものでした。私自身、叱られるとやる気をなくすタイプでしたから、ふと思ったんです。糖尿病の治療とは医療モデルではなく、教育モデルではないかと。

そんなとき、海外から自己血糖測定器が輸入されてきて、測定器を使う医師も出てきました。ただ、それを一次予防目的で使おうと考える人は、ほとんどいなかったのですが、私は自己測定こそが糖尿病の特効薬になると思ったんですよね。糖尿病になるか、ならないかの人にとって、自分で数値を見ることにより、人から言われてやるのではなく、自分から生活習慣の改善を心がけるようになると考えたのです。

糖尿病の予防は、二次予防でも三次予防でもなく、一次予防をやるべきだと思ったんです。糖尿病について勉強して、薬物療法の専門家になりたかったわけではなく、全体として糖尿病を発症する人を減らしていかなければいけないと思ったのが、現在の行動につながっています。

――検体測定を始めてみて、実際はどうでしたか。

病院に行っていない人が多すぎて驚きましたが、自己血糖測定器を使いこなしている人は、グングン数値が改善していきました。数値が分かるというのは、こんなにも人に影響を与えるのかと思いましたね。やはり叱られても、隠れて食べてしまう患者さんって多いんですよね。それが自分の目で数値を見ながら「自己責任だよ」と言うと、これくらいなら食べてもいいと、プラス思考に変わっていきます。このように、血糖管理を「これもダメ、あれもダメ」という“引き算”から、「これならいい、これくらいならいい」という“足し算”に変えると、患者さんの気持ちも明るくなります。自己血糖測定器１つで、患者さんの人生を明るくすることができるということを実感しましたね。

検体測定の先駆者で苦労も
100％面対応で集客努力

――検体測定を始めるに当たって苦労はありましたか。

勢いよく始めてみたものの、最初は様々なところから忠告や非難を受けました。「自分のやっていることは間違

↗

あなたの、
かかりつけ薬局へ。
あなたに寄り添い、健康をささえる
“いつもの窓口”になります。

阪神調剤ホールディング株式会社
人とのつながりを大切にし、みなさまを笑顔にします。
http://www.hanshin.holdings/ 阪神調剤ホールディング 検索